

ボランテティアと私

— 何かを求めて —

◇ 児童福祉 ◇

文学部2年 鍋山未奈子さん

人身売買―。現在でも世界中で行われている深刻な国際社会問題だ。強制労働や性的搾取を目的として行われ、タイ、ミャンマー、中国などアジア地域からの移送が多いといわれている。貧困者や子供が対象となることが多く、世界中から非難の声があがっている。



愛情溢れる笑顔で語る鍋山未奈子さん

夏休みに、タイ北部ハヤオでボラ
人身売買から子供を保護する施設

国際ボランテティアサークル『ひつじぐも』に所属する文学部2年の鍋山未奈子さんは、去年の夏休み、タイ北部の町ハヤオにある、人身売買の取引から子供を保護している施設でボランテティアを行った。

そこで暮らす子供たちは、親と離れ、生活のすべてを自分たちだけで行っている。子供たちと一緒に遊ぶのが、ボランテティアの中心だ。

「スポーツ大会や折り紙、ボール遊びなどをして遊びました。みんな子どもなので遊びを通してコミュニケーションをとることが多く、言葉はあまり必要ではありませんでした」。言葉は通じなくても、一緒に遊べば気心は通じる。子供たちにとって、遊びは「世界共通語」なのだ。子供たち



縄跳びで子供達と遊ぶ

が学校に行ってしまう昼間は、施設の人に人身売買の問題について教わった。

施設とその周辺の環境はどうなのだろうか。衛生面など、大変なことはなかったのか、聞いてみた。「施設のシャワーは水しか出ず、夜は寒かった町の周りの家などには、きれいでないところもあった」という。「でもボランテティアをしていて汚いから嫌だ、と思ったことは一度もないです」ときつぱりと言いつける。「自分がボランテティアをしている、と思ったこともあまり無くて……。私の中では、子供たちの所へ遊びに行っているとい

う感覚なんです」と明るく答えてくれた。

私たちの無知・無関心が問題

一番の受入国は日本にシヨック

鍋山さんは、「人身売買についての知識が足りないから、この問題は無くならないんです」と断言する。「子供は帰ってくる」と思っている親の

人身売買に関する無知、無関心がある。

「施設では子供たちに人身売買についてきちんと教えていました。だから、彼らの将来の夢はともしつかりしている。『これ以上、人身売買の被害にあう子供がでないように、知識を授ける先生になりたい』とか、『病気を治す医者になりたい』とか。私たちの子供の夢とはずいぶん違っていて驚きました」

ボランティアをしていて、シヨックを受けたことがある。タイで行われる人身売買の一番の受入国は日本、という事実だ。

「ニーズのある国があるから、この問題が発生する。それが日本だと知ってシヨックでした。実際に関わっている人はわずかでも、日本人全体が悪い印象を持たれてしまう。日本の政府はもっと、人身売買の事実を知らせるべきではないかと思いました」

一緒にみんなの食事づくり

日本見つめ直すいい機会

事前調べを怠らなく

タイの現地に行くにあたって、事前にいろいろ調べ、勉強したが、十分でなかったと思ったこともあったそうだ。パヤオを離れ、首都バンコクの近くの町ナコンパトムで、エイズで両親を失った子

供や、エイズになった子供を預かる施設に行ったときのことだ。施設の人にエイズについて教わった後、「エイズは日本ではどうなの?」と聞かれ、答えられなかった。

「自分が日本について分かっていなかった。外から日本を考えたとき、自分の国を見つめなおす良い機会になりました。反省会では、友達に日本についても調べた方がよいよ、とアドバイスをしました」

子どもたちの笑顔が「幸せ」

ボラ体験を多くの人に知らせたい

大学ではゼミやFLPの活動を通じて国際協力について勉強している。「私は人と触れ合うことが大好きなんです。子供たちは本当に純粋で、笑ってくれると私も嬉しい。私のボランティアの経験をより多くの人に知ってもらうことも、日本に居ながらにしてできる国際協力だと思います」と鍋山さんは新たな活動の目標もみつけた。

「大学では、やりたいことをどんどんやっていきたい。今は、東ティモールに行ってみたいと思っているところです」

アジアの子供たちの笑顔が、鍋山さんの気負わないボランティアを支える原動力となっているようだ。

(学生記者 石川可南子 法学部1年)

